

吳瑞『日用本草』について

——二つの傳本をてがかりとして——

谷 口 綾

はじめに

『日用本草』は、元代の吳瑞によって編纂された食物本草である。當時の飲食物およそ五四〇種を、諸水、五穀、五蓄、諸禽、蟲魚、五果、五菜、五味の八類に分類し、名稱、形狀、採集・栽培法、性質や效能、活用法などを列記する。元・天曆二年（一三二九）に八卷にまとめられて刊行され、至正三年（一三四三）に再版されたと考えられている。⁽¹⁾ 傳存する『日用本草』はすべて明版で、吳瑞から七世代のちの子孫となる吳鎮が校補し、嘉靖四年（一五二五）頃に『家傳日用本草』として版行さ

れた（龍谷大學大宮圖書館寫字臺文庫、東京國立博物館資料館に現藏）。

本書はこれまで龍谷大學が所藏する明版で知られていたが、近年になり東京國立博物館のデジタルライブラリで公開され、國內二件目の所在が明らかとなった。『日用本草』をめぐっては、龍谷大學藏の明版をもとに、書誌および本草史の分野で研究が進められてきたが、新たに確認された東京國立博物館の『日用本草』との関係や著者をめぐる歴史的な考察については未だ行われていない。

この二つの明版が傳來した頃の日本では、時代が安土

桃山から江戸へと移り鎖國體制が敷かれた後も、中國の醫藥典籍が輸入され続け、これらの翻刻が行われていた。それまでは中國の醫藥典籍を一方的に需要してきたのに對し、江戸時代中期には、中國醫籍の注釋書や醫學啓蒙書など、日本獨自に内容を變化・發展させた醫藥書の刊行が増加している。特にこの時期の本草學は、幕府の庇護の下に研究の幅が廣がりをみせ、儒學教養を兼ね備えた日本人醫師らによって多くの食療書も著されている。⁽³⁾

同時代に傳わった明・李時珍の『本草綱目』が、當時の醫藥・藥理の分野で多大な影響力を持っていたことは周知に屬そう。そのような狀況の下で、元人による『日用本草』の内容は人々にどのように捉えられていたのだろうか。本書成立の背景ならびに本邦での受容の様子を讀み解くことは、『證類本草』を基幹とする元時代の本草書が、獨自に展開しつつあったこの時期の日本の醫藥文化に與えた影響を考える上でも必要な作業である。

そこで本稿では、これまでの研究成果に依りつつ、龍谷大學と東京國立博物館に現存する二つの『日用本草』

をいま一度整理し、兩書の關係や來歴、著者や刊行の狀況を探るとともに、日本での受容の様相についても考えてみたい。

一 『日用本草』の二つの傳本

『日用本草』は、元版、吳鎮による明版、そして明代錢允治の『食物本草』に收められた縮編版の三種が、十四世紀以降に中國内外で流通していたことが分かっている。たとえば、中國では、藏書目錄の著錄狀況などから、明代から清代にかけて『日用本草』八卷本が流通していたことが判明しており、⁽⁵⁾同時代の日本でも、醫藥書を著す際に参考にした食物本草の一つとして『日用本草』の名前が擧がるほか、江戸後期の醫藥古典籍の傳本調査でも明版の所在が特定されている。⁽⁶⁾

しかし、澁江抽齋等『經籍訪古志』（明治十八／一八八五年刊）を最後に『日用本草』の所在に關する中日雙方の記録は途絶え、かつて日本で存在していたはずの傳本もながらく所在不明とされてきた。そのため本書は、錢

允治の『食物本草』や李時珍の『本草綱目』に引用されている文章によって内容の一部が知られていたにすぎず、龍谷大學所蔵本の本格的な調査が開始されるまで、その全容が明らかになることはなかった。

このような状況の中で、一九九四年から一九九七年にかけて、龍谷大學は本願寺歴代宗主の藏書である寫字臺文庫を中心に和漢古典籍に對する調査を行った。この調査によって『日用本草』の所蔵が確認され、本書は現存する國內外で唯一の八卷本としてその史料的价值が示されることになった。⁽⁷⁾

さらに、二〇〇五年から二〇〇七年にかけて、東京國立博物館が江戸幕府舊藏資料の悉皆調査を實施した。その結果、一萬二千冊餘りにおよび幕府舊藏資料群の中から、もう一つの『日用本草』が確認され、その後、同館が運営するデジタルライブラリー上に公開された。⁽⁸⁾

龍谷大學の『日用本草』（以下、龍谷本）については、眞柳誠氏等の解題、鄭金生氏の校註によって、同書の書誌學的側面は概ね明らかにされている。⁽⁹⁾しかし、龍谷本

より遅れて確認された東京國立博物館資料館の『日用本草』（以下、東博本）については、ウェブ上に公開されたものの、史料の分析は十分になされておらず、兩本の關係も未だ明らかではない。そこで以下では、この二つの傳本を紹介するとともに、これらの關係について考えてみたい。

龍谷本 龍谷大學大宮圖書館藏

現狀…八卷一冊、線裝。表紙に龍谷大學大宮圖書館ラベル「寫字臺」[690.9\449-1]および無記ラベル貼附。每半葉匡郭約一八・九×二二・七。四周雙邊、有界十二行二十四字。版心書名丁附、白口黑魚尾。遊び紙裏右下に印記「寫字臺之藏書」あり。目錄題「家傳日用本草目錄」、「新安海寧醫學吳瑞編輯」、「七世孫鎮校補重刊」とあり。内題「家傳日用本草」、「新安醫學吳瑞編輯」、「七世孫鎮校補重刊」とあり。各所に朱點、朱引、書入れ（朱書含む）あり。蟲損あり。李汛序文後半、阿思蘭海崖序文前半、吳瑞序文前半の該當葉缺丁。卷六「桃毛」から「模

櫨」(四・五葉)、「柰子」から「梨」(七・八・九葉)三四種該當葉缺丁。卷八末葉に刊記「歙西仇川黃錠黃銑刊」あり。表装修理の形跡あり(時期不明)。

構成…明・嘉靖四年(一五二五)李汎重刊序、元・至正三年(一三四三)阿思蘭海崖序、元・天曆二年(一二三九)吳瑞序、家傳日用本草目錄、卷一・諸水類(十三種)、卷二・五穀類(三二種)、卷三・五蓄類(一五二種)、卷四・諸禽類(六四種)、卷五・蟲魚類(六六種)、卷六・五果類(九八種)、卷七・五菜類(八一種)、卷八・五味類(三四種)、「四時調神所宜」、「四季末一十八日皆主脾旺」、「五味所走所疾」、「黃帝問伯高穀之所主」、「五味五色相宜所合」、「飲食所宜所忌」、「五行相生相尅」、「五臟六腑表裏應候」、明・嘉靖四年陳鰲重刊後序、明・嘉靖四年吳鎮識語。

東博本 東京國立博物館資料館藏
現狀…八卷一冊、線裝。表紙に上から東京帝室博物館圖

書レベル「漢書／番號165／函61／架4／冊1」、帝國博物館藏書票「漢籍／醫書部／一九五號／西二ノ三架／一冊」、同「西二ノ三」(下部)、東京國立博物館資料館ラベル「052/4-42」貼附。外題(墨書)「日用本草」、外題の下に「完」字あり。每半葉匡郭約一八・七×一二・三。四周單邊、有界十二行二四字。版心書名丁附、白口黑魚尾。序文一葉表に印記あり。右上から順に「吉家氏藏」、「多紀氏藏書印」、「稱意館藏書記」、「醫學圖書」、「躋壽殿書籍記」、「帝國博物館圖書」。内題「家傳日用本草」、「新安醫學吳瑞編輯」、「七世孫鎮校補重刊」とあり。各所に朱點、朱引き、書入れ(朱書含む)あり。蟲損あり。元・至正三年阿思蘭海崖序、元・天曆二年吳瑞序、家傳日用本草目錄、明・嘉靖四年陳鰲重刊後序、明・嘉靖四年吳鎮識語の該當葉缺丁。表紙・裏表紙に、印刷題箋を用いた裏打ちの形跡あり(時期不明)。

構成…明・嘉靖四年李汎重刊序、卷一・諸水類(十三種)、卷二・五穀類(三二種)、卷三・五蓄類(一五二

種)、卷四・諸禽類(六四種)、卷五・蟲魚類(六六種)、卷六・五果類(九八種)、卷七・五菜類(八一種)、卷八・五味類(三四種)、「四時調神所宜」、「四季末一十八日皆主脾旺」、「五味所走所疾」、「黃帝問伯高谷之所主」、「五味五色相宜所合」、「飲食所宜所忌」、「五行相生相尅」、「五臟六腑表裏應候」。

從來、龍谷本と東博本は同版とみなされてきたが、⁽¹⁰⁾ 實見すれば同版でないことは明らかである。また、東博本は朝鮮活字版であるとの報告もあるが、⁽¹¹⁾ 明らかに朝鮮版ではない。兩本を比較してはじめて、この二本はともに吳鎮重刊の明版の系統に屬するものの、同一の版ではないことが分かる。

全體的に缺丁箇所を除いて内容や版式に大きな違いはないが、それぞれの構成、匡郭、魚尾、字體、表記(誤字など)の細部には違いが見られる。葉數の下に表れる刻工の名も兩本で異なり、たとえば龍谷本卷二の二葉目と三葉目では「定」とあるのに對し、東博本の該當葉で

はともに「先」と表されている。⁽¹²⁾ そして龍谷本の卷末には「歛西仇川黃錠黃銑刊」の刊記があるが、東博本には殘されていない。

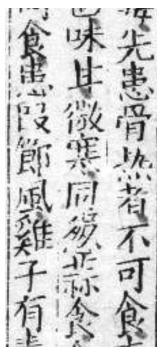
兩本の序文を比べると、龍谷本は、肉筆の線により忠實(肉筆のイメージがよく殘されている)に彫られた印象を受けるが、東博本には、所々に寫し崩れと思われる刻字の不自然さが残り、また龍谷本よりも文字の線が細くなっているように見受けられる。また、東博本の本文には、たとえば卷四の一葉表六行目の「米」字、同葉裏五行目の「葱」字のように、もとの文字がよく理解されずに刻字されて誤字となった箇所が確認できる(【圖版1】【圖版2】)。従って、東博本は龍谷本の覆刻本ではないかという推測が可能である。さらに、龍谷本には全部で十二カ所の墨釘が確認できるが、東博本にはそのいずれにも文字が入っており、龍谷本とは別の箇所に墨釘が残る。⁽¹⁴⁾ これは東博本が龍谷本を覆刻した際に補われたものと考えられる。⁽¹⁵⁾

龍谷本は、缺丁によって李汛重刊序の後半部分と卷六



圖版 1

『家傳日用本草』
卷4・1 葉裏(部分)
龍谷大學大宮圖書館藏



圖版 2

『家傳日用本草』
卷4・1 葉裏(部分)
東京國立博物館
資料館藏

しあうことではじめて、その全容を確認することが可能となる。

二 吳氏と『日用本草』をめぐる人々

中日雙方で『日用本草』の記録が残されているのに對し、その著者である吳瑞と一族の動向に關しては、當時の史料にほとんど著されていない。これまで断片的に理解されてきた吳氏の經歷と本書刊行の経緯を、ここであらためて整理しておきたい。

二つの明版に残された序文と識語は全部で五編ある。年代順に整理すると、天曆二年の吳瑞の自序、至正三年の阿思蘭海崖の序文、そして嘉靖四年の李汛の序文・陳鰲の後序・吳鎮の識語となる。吳瑞の系譜を端的に著しているのが以下に示した李汛の序文で、吳氏と『日用本草』刊行の経緯は、この記述でもって理解されてきた。

の内容の一部が失われており、李汛の序文の全容は、これまで多紀元胤『醫籍考』（文政二／一八一九年成書）に載録された録文に頼らざるをえなかったが、このたび東博本が新たに確認されたことで、龍谷本では確認できなかった序文の残りと卷六缺落箇所の復元が可能となった。一方の東博本は、本文の内容に缺落は見られないものの、李汛の序文が残されるだけで、阿思蘭海崖の序、吳瑞の序、家傳日用本草目錄、陳鰲の重刊後序、吳鎮の識語を缺いており、こちらも龍谷本と同じく完本ではない。そのため『日用本草』は、龍谷本と東博本の二つで補完

此元天曆中、海寧醫學吳君瑞卿所編日用本草。是已歲久、舊板殘缺殆半。其六世孫景素有祖風、嘗有志

翻刻、未克而沒。其子世顯繼起卒事、而屬豫序。

（『日用本草』重刊日用本草序）

李汛の序文によれば、天曆中に海寧醫學の吳瑞によって編纂された『日用本草』は、刊行からすでに年久しく、舊板は損なわれてほぼ半分になってしまった。六世孫の吳景素は吳瑞の學風を受け繼いでおり、かつて『日用本草』の翻刻を圖つたのだが、果たせずして亡くなつてしまった。景素の子である世顯（吳鎮）は、父のあとを繼いで翻刻を成し遂げ、そこで私（李汛）に序文を依頼してきたのだ、という。

吳瑞とその周邊

吳瑞の経歴もほとんど記録が残つておらず、本書の巻首や序文の中に「新安醫學」、「新安海寧醫學」、「海寧醫學」とあるとおり、新安出身で天曆年間（一二三二—一二三三）に海寧州（現浙江省海寧市）の醫學にいたことしか分かつていない。元代では、地方でも教育機關である

醫學の建設が進められ、海寧州では延祐五年（一二一八）頃から本格的に醫學の整備が始まった。⁽¹⁷⁾當時は、醫學を營む者の就學や、學校の維持・經營への参加が許されていたから、⁽¹⁸⁾代々の醫者（世醫）であつた吳瑞も醫學に關わることができたのだろう。吳瑞本人も詳しい經歷を残していないが、『日用本草』を著した事情については、以下のように述べている。

瑞世家醫學、醫之於人、僅供方匕、謂之輔養、固不敢不審。爲人之所以自養、莫切於飲食。或不審焉、如斛茶吐痕、醢醢傷血、生啖孳蝌蚪、勸學誤螫蜚。類此者多。因閱神農經、汲諸方書、摭凡藥物。尋常可登觴俎者、水穀・禽獸・蟲魚・蔬茹・果蓏、分爲六部。物之性、寒溫・良毒・主治、編爲書、部各一卷。著之梓墨、以奉士大夫、其覽存之。

（『日用本草』「自序」⁽¹⁹⁾）

吳瑞は、人の養生にとって飲食こそが要であり、症例

の多い病を例に舉げて日用の飲食を精査することの重要性を説く。そして、これまでの本草や醫藥書などから藥物を選びとり、日頃の飲食とすべきものを六つの項目に分け、その性質や效能などを編集して一書とし、これを版刻して當時の儒者たちの閱讀に供す、と述べている。吳瑞は、代々續く醫者としての経験や所見から、人の養生の實現を日常の飲食に求め、日用の食物や藥物の效能を精査して食養生についての正しい見識を著そうとしたのである。

序文ではさらに「亦た儒者に聞きて云く、宣聖は沽酒を飲まず、饅餉し餒敗し、色惡く臭い惡く、飮を失い時ならざるは、皆な食らわず、と。飲食の慎む所、豈に但だ醫の云うのみならんや」と續け、⁽²⁰⁾吳瑞は、『論語』郷黨篇の一節を援用して、飲食有節がもとより儒者の關心事であることを示し、本書の内容も儒者の飲食の關わり方に合致するものであることを主張している。當時の儒者に向けた食養生の書に位置づけることで、醫者（自身）の著作を公に残し廣めようとしていたのだろう。

吳瑞が自序を著してから十四年後、刊行に向けて寄せられた阿思蘭海涯の至正三年の序文には、吳瑞と『日用本草』について以下のように記されている。

偉哉、海寧瑞卿吳君者、世醫名家、著日用本草。明其養害避忌、見其情性善惡、使人知之、從而鋟梓廣之。夫豈不爲良心也哉。□因樵茗^[贈]之、次兼於^[臨]軒朱先生室獲觀其書、徵餘言記之。

（『日用本草』「日用本草序」）⁽²¹⁾

この序文を書いた阿思蘭海涯（アルスラン・カヤ）は、元代の散曲作家として知られるウイグル人の貫雲石（小貫石海涯／セウインチュ・カヤ）の息子で、當時は嶽州路（現湖南省嶽陽市）に赴任していた。それ以前に彼は、海寧に近い蘭溪州（現浙江省蘭溪市）や寧國路（現安徽省宣城市）で達魯花赤や樵茶提舉の職を歴任していたことから、⁽²²⁾その頃の知人を介して吳瑞と『日用本草』の存在を知り得たことがうかがえる。

先行研究では、吳瑞の自序と阿思蘭海涯の序文の日附に基づき、『日用本草』は天曆二年に初版が刊行され、至正三年に再版されたと考えられている。これに従えば『日用本草』は二度版行されて出回っていたことになるが、藏書目録や關連史料上には『百川書志』卷十・醫家の條に書名が残される程度で、元版の流通や利用の状況を把握することは難しい。

このとき阿思蘭海涯が知人の宅で初版の『日用本草』を目にしたのか、あるいは未刊の『日用本草』を知ったのかは、二つの序文だけで判断することはできず、吳瑞が自序を著したのち、『日用本草』は同地の役人を通じて貫家の阿思蘭海涯から序文を得る機會に恵まれ、初版の刊行に至ったという可能性も否定はできない。當時の記録が乏しく、本書の元版が現存していない以上、元版刊行の時期については慎重に判断する必要がある。

吳景素とその周邊

至正三年の序文を最後に、吳瑞をはじめ一族の動向は

史料上に確認できなくなる。しかしそれから二〇〇年後、十六世紀の明代半ばになると、吳瑞から六世代目にあたる景素（宗衛公）という人物が、突如として家業でもって知られるようになる。その様子は嘉靖四年の陳鰲の後序で以下のように記される。

六世傳至宗衛公、醫道大行、活人莫計、郡邑之請藥者、接迹其門。篁墩程先生嘗服其藥、屢疾屢瘳、乃書景素堂三字以顏其軒。公甚愆重刊是書、未就而卒。

（『日用本草』書家傳日用本草後）

ここには、景素が家業によって成功をおさめていた様子が著されており、吳瑞の『日用本草』を重刊しようとしていたことが伝えられている。當の景素は果たせずして亡くなってしまいが、吳氏がその後も世醫として存続し、息子の吳鎮の代で鰲刻を實現するだけの社會的・經濟的な基盤が築かれていたことがうかがえる。

さらに注目されるのは、文中の「程先生」との関係で

ある。景素は程先生に薬を處方したことが縁となり、「景素堂」三字を軒に掲げるようになった、と二人の關係が記される。この人物は徽州出身の程敏政（一四四四—一四九九）で、成化二年（一四六六）に進士及第を果たしてからは、翰林院編修を皮切りに要職を歴任し、最終的には禮部侍郎にまで上った。汚名を着せられ弘治十二年（一四九九）に官界を退き、ほどなくして亡くなることになるが、當時の程氏は累代の名家であり徽州では名の知れた一族であった。⁽²³⁾

この程敏政の人脈が明版の刊行に影響していたことは、序文を寄せた山西澤州泌水學教諭の陳鰲、南京工部尙書郎の李汛との關係からもうかがうことができる。當時、二人が徽州の儒學生として程敏政と關わりを持っていたことが、彼の著作である『篁墩文集』に記されている。

弘治戊午春、天下儒學生以貢上京師願就教職者七百人。吏部汰其半、以請詔試于翰林、又汰其半。而吾郡陳鰲文元與焉。亦可謂難矣。吾郡六邑之來貢者、

皆願就教職、與者獨文元一人獲。廷授遂昌訓導。

（『篁墩文集』卷三五・贈遂昌訓導陳文元序）

弘治十一年（一四九八）、地方儒學の教職を希望する儒學生七〇〇名に對し、選拔試験が實施された。推薦を受けた徽郡からの應募者がみな教職を求める中、陳鰲がただ一人合格し、遂昌（現浙江省麗水市遂昌縣）縣學の訓導の職を得られたことが記される。休寧の陳氏は元・陳櫟（一二五二—一三三四）で知られた儒者の名家であり、陳鰲は休寧に戻っていた程敏政に従って南山書院で學んでいる。⁽²⁴⁾また、李汛についても同じく『篁墩文集』の中に以下のような記述が残っている。

李源書院、在祁門邑東五十里、今徽郡儒學生李汛彦夫之所創置也。李氏世居李源、因姓其地。源之人多業儒、至彦夫尤力學、有聲場屋。彦夫以嘗學於豫也、來請記其事。（『篁墩文集』卷十八・李源書院記）

李氏は李源（現浙江省金華市浦江あたり）に由來する儒者の家系で、當時は祁門（現安徽省黃山市祁門縣）に移住していた。徽郡の儒學生であつた李汎もまた程敏政の教え子で、弘治十八年（一五〇五）には進士及第を果たしている。⁽²⁵⁾

こうした徽州の地域社會での關係があつた中で、同郷の醫者である吳氏が『日用本草』を版行しようとしていた。しかし、景素は途中で亡くなり、息子の吳鎮がそれを引き継ぐことになる。その次第を彼は以下のように著している。

右家傳日用本草六部凡八卷、乃七世祖瑞卿公編輯。梓行于世、歷二百餘年、版蠹、字多亥豕。先君景素公、嘗愆校正重刊、未果而卒。鎮不肖、恐先善弗傳、無所追罪、因正訛補逸、命工鈐梓。

（『日用本草』〔吳鎮題識〕⁽²⁶⁾）

吳鎮は「先善の傳わらざれば、罪を追るる所なきを恐

れ、因りて訛を正し逸を補い、工に命じて梓に鈐らしむ」と著し、祖と父の善行を世に傳えんがために翻刻に及んだことを表明している。さらにタイトルには新たに「家傳」の二字を附け加えており、亡父の遺志を果たし、版を改めて刊行する旨を強調する。

刊行に先立って、吳鎮は徽州を離れそれぞれの職に就いていた陳鰲と李汎に文章を依頼した。二人が依頼を引き受けた背景に、程敏政と景素の關係が影響していたことは、前掲の陳鰲の後序に明らかである。その上で、李汎は『日用本草』の趣旨を認めて吳瑞を「善學」と評し、祖の遺文を再び世に廣めようとする吳鎮を「善紹」と著した。⁽²⁷⁾ 陳鰲もまた吳瑞の『日用本草』と吳鎮の行爲をそれぞれ評價している。⁽²⁸⁾

本書の重刊に際し、吳鎮は亡父の遺志を果たすことに主眼を置き、吳瑞を起點とする吳氏家傳の書としてあらためて『日用本草』を公刊しようとしていた。これは、明初以來、新安醫學の中心でもあつた徽州での、嘉靖期における『日用本草』の重刊が、同地域の出版業の隆盛

に従うものであったと同時に、經濟的・社會的位置をあら程度高めていた吳氏父子が、一族の社會的地位をさらに高めるために、程敏政ら名士の名を借りて出版したもの、と位置づけられる。しかしその出版は、顧みられなくなっていた「食物本草」の一種としての位置から、結果的に萬暦年間の『本草綱目』に採録されて、江戸時代の醫藥學にまで影響を與えることになったという點では、重要な意味を持つ事柄でもあった。

三 印記からみる『日用本草』の來歴

次に、二つの傳本に残された印記を手がかりとして、本書の來歴について考えてみたい。先に觸れたとおり、『日用本草』の日本への傳來は、史料上では十七世紀・江戸時代にまで遡る。當時の中國醫藥書について序跋文や考證等を記し、現存・散佚の狀況を示した『醫籍考』卷十五・食治の條には、「吳氏瑞の日用本草、醫藏目錄八卷、存」とあり、『日用本草』が明・殷仲春の『醫藏目錄』・普醒函目の條に著録されることを挙げたあと、

現存の事實が示される。

『醫籍考』には書誌情報が少なく、『日用本草』の存在狀況しかうかがえないが、江戸幕末の漢籍考證の精華である『經籍訪古志』では、以下のように説明されている。

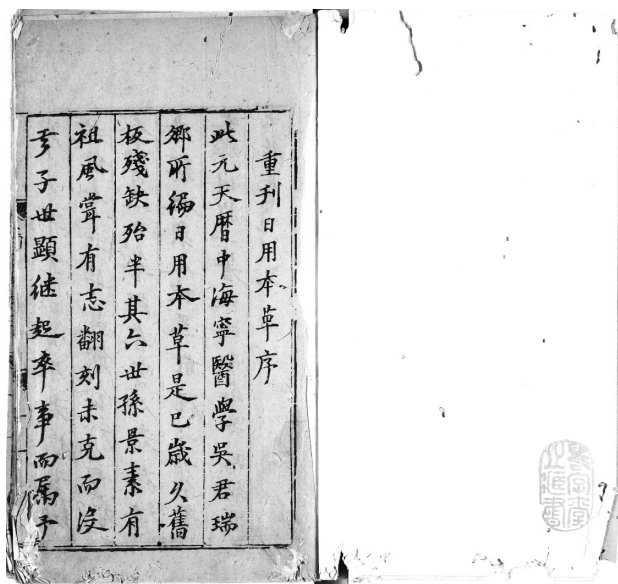
家傳日用本草八卷 嘉靖四年刊本 聿修堂藏
元新安醫學吳瑞編輯、七世孫鎮校補重刊、首有嘉靖四年李汎序、有吉氏家藏及稱意館藏書記印。

（『經籍訪古志』卷七・醫家類）

この記録から、多紀家聿修堂に所藏される『日用本草』が、明・嘉靖四年の吳鎮による校補重刊本であったことが分かる。多紀家とは、平安時代の名醫・丹波康賴の後裔で、江戸醫學界の權威として、また醫學教育の主幹として著名な醫家の家系である。その多紀家の明版には、はじめに嘉靖四年の李汎の序文があり、吉氏と稱意館の印があることが記録される。

では、あらためて龍谷本と東博本を確認してみよう。

兩本はともに李汛の序文で始まっているが、東博本の序文一葉表に「吉氏家藏」、「稱意館藏書記」の印記があつて『經籍訪古志』の記録と一致している（圖版3）【圖



圖版3 『家傳日用本草』序文・1葉表 龍谷大學大宮圖書館藏

版4】。『經籍訪古志』が他四編の序文に言及していないのは、當本に李汛の序文しか残されていないことを示している。また、先に述べた通り、東博本の李汛の序文



圖版4 『家傳日用本草』序文・1葉表 東京國立博物館資料館藏

に脱落はなく、『醫籍考』に移録された同序文の文章とも完全に一致している。眞柳氏が言及した通り、この東博本が『醫籍考』や『經籍訪古志』に著録された多紀家の『日用本草』であることは間違いない。²⁹⁾

そして、この「吉氏」とは京都角倉の吉田家のこと、この印は吉田宗恂（一五五八―一六一〇）以降、同家累代に使用されたものである。³⁰⁾ また吉田家の私塾で別稱でもあった「稱意館」の印も伴用されていることから、東博本はもともと吉田家の藏書であつたことが分かる。

角倉吉田家は、十六世紀以降、山城國角倉（現在の京都市右京區）を據點に酒造、金融、土木、醫業を展開して豪商へと發展した一族で、吉田徳春（一三四八―一四六八）の頃から醫業に従事したという。中でも吉田宗桂（一二二―一五七二）は二度の遣明で知られ、天龍寺妙智院の住持・策彦良周に隨行して天文八年（嘉靖十八／一五三九）、同十八年（嘉靖二八／一五四九）に北京を訪れている。幕府編纂の家譜集である『寛政重修諸家譜』（文化九／一八一二年成書）に、「天文」十九年歸朝のと

き多く醫書を携え來る」と著されるように、宗桂の入明を機に、吉田家には大量の醫藥古典籍がもたらされたといわれている。³¹⁾

現時點では、關連文獻上に『日用本草』と吉田家とを直接結びつける記録は見いだせない。ただ、先行研究に示されるように、吉田家は天龍寺をはじめ五山派寺院との關係が深く、一族で安南との朱印船交易に携わるなど、明版の典籍を入手しえる環境にあつた。東博本は、宗桂の入明以降に舶來し、息子の宗恂の代には稱意館に收藏されていたのだろう。

さらに、「吉氏家藏」印の下には「多紀氏藏書印」があり、序文一葉表の中央上部には、上から順に「醫學圖書」、「躋壽殿書籍記」の印が押され、東博本が吉田家（京都）から多紀家（江戸）へ移っていることが見てとれる。躋壽館（躋壽殿）は、明和二年（一七六五）に創設された多紀氏の私塾で、寛政三年（一七九二）に幕府直轄の醫學校として醫學館に改稱されている。³²⁾

「多紀氏藏書印」、「醫學圖書」、「躋壽殿書籍記」これ

ら多紀家の三種の藏書印の使用年代は明確にされていないが、内閣文庫の實査では、「多紀氏藏書印」は、併用印や書寫の年代から勘案して七代目の元簡（二七五五―一八一〇）以後に、「醫學圖書」と「躋壽殿書籍記」の兩印は、江戸・天明から文政期（二七九一―一八三二）の元簡、八代目の元胤（一七八九―一八二七）の時代に併用されていたと推定している。⁽³³⁾

この他にも多紀所縁の藏書目録からは、東博本が少なくとも江戸・文政期（一八一八―一八三二）のはじめ頃には同家の所藏となっていたことがうかがえるが、移管の事情までは定かではない。いずれにしても、東博本は文政期初頭に吉田家から多紀家の聿修堂に渡り、元簡から元胤の時代に躋壽館・醫學館の藏書として整理・捺印されたものと考えられる。

そして最後に、「帝國博物館圖書」の印があり、明治維新後は最終的に帝國博物館（現東京國立博物館）へ移管されたことが分かる。醫學館の解體後、その藏書はひとまず大學東校（現東京大學）に引き繼がれ、度重なる

所管換えを経て、現在の國立公文書館（内閣文庫）、宮内廳書陵部、東京國立博物館に移管された。⁽³⁵⁾ 醫學館最終時の藏書が知れる高島祐啓・岡田昌春の『躋壽館醫籍備考』（明治十／一八七七年刊）に『日用本草』は明記されており、醫學館舊藏の醫藥古典籍の一つとして、この帝國博物館時代（一八八九―一九〇〇）に移管・整理された。博物館草創期の目録からは『日用本草』に關する記録は確認できないのだが、この帝國博物館の藏書印の初出が明治二年（一八八九）五月頃であること、表紙に茶色縦書きの帝國博物館藏書票が貼附されていることを踏まえると、明治二年前後が收書時期の一應の目安といえる。⁽³⁷⁾

その後は、ラベルが示すとおり、東京帝室博物館、東京國立博物館の圖書として引き繼がれ、現在では東京國立博物館資料館にて保管されている。このたびの公開は、二〇一〇年から行われた東京國立博物館が所藏する線裝本漢籍の邇及作業に起因するもの⁽³⁶⁾、JISCやNACSIS-CATおよび同館の圖書システムに書誌が登録され、ウ

エブ上に畫像が公開された。

一方の龍谷本には、本願寺歴代宗主の藏書を示す「寫字臺之藏書」印が捺印される。寫字臺印には三種類あり、このうち二つが現存・公開されている。⁽³⁸⁾一つは矩形石印で、本願寺第十七世宗主・法如上人（二七〇七―一七八九）から第十九世宗主・本如上人（二七七八―一八二六）の頃に蒐集された書籍に對して用いられた。もう一つは楕圓形石印で、これは第二〇世宗主・廣如上人（二七九八―一八七二）による寫字臺の整理時に使用され、以後の藏書に對して用いられた。龍谷本には楕圓形の印が使用されていることから、廣如上人の發案で本格的に整理が始められた弘化三年（一八四六）以降に收められた寫字臺の藏書であつたことが分かる。

なお、印記はこの一箇所にとどまるが、龍谷本には刊記が残されている。「歛西^仇川黃錠黃銑刊」とあり、同本は現安徽省歙縣虬村の黃錠（一二四五―一五六七）と黃銑（一五〇四―？）の二人によつて版刻された。彼らは徽州黃氏の二五代目にあたり、それぞれがけた嘉靖期

の諸本が現在も傳わっている。⁽³⁹⁾

寫字臺文庫には、『日用本草』の他にも、同時代の黃氏による版として、黃鍔（一五三二―？）が版刻した『仁齋直指附遺方論』（嘉靖二九／一五五〇年刊）が所藏されている。黃鍔は、黃錠・黃銑とは從兄弟の開柄で、⁽⁴⁰⁾同世代の版刻として版式や字體が近似していることで、『仁齋直指附遺方論』は龍谷本の刊行時期（嘉靖四年重刊）を特定する證左とされた。しかし、それぞれの印記には違いが見られ、矩形石印の藏書印が押された『仁齋直指附遺方論』は、先に版行された『日用本草』（龍谷本）よりも早くに寫字臺に收められていたことになる。

『仁齋直指附遺方論』を含め、寫字臺の藏書で矩形石印が用いられた醫藥本草書は全部で八五點、そのうち元末から明代にかけてのものは三八點におよび、龍谷大學大宮圖書館の調査では、これらが第十八世文如上人（一七四四―一七九九）の時期に蒐集されたとの見解が示されている。⁽⁴¹⁾これは、『日用本草』の受け入れが寫字臺の整備よりも以前に遡ることを示唆するものであるが、本書

の入手時期やルート、これら醫藥書との關係等については調査段階にあり、現時點では判然としない。しかし、文如上人の時期に『日用本草』も蒐集され、のちになつて寫字臺に收藏された可能性が残る點は指摘しておきたい。

むすびにかえて

現在、吳瑞の『日用本草』は日本國內で二件の所藏が確認されている。東博本は、近年まで行方不明とされていた多紀家の舊藏書である。角倉吉田家に由來し、多紀家の躰壽館、醫學館を経て現東京國立博物館に移管された。傳來の時期は吉田家との關連から十六世紀後半から十七世紀頃と推定され、本版は嘉靖版であることからすると、ほぼ刊行と同時代に日本にもたらされたことが明らかにになった。

一方の龍谷本は、寫字臺の文庫整備が始まる十九世紀以降に本願寺に收められたものである。『醫籍考』や『經籍訪古志』に言及はなく、從來から知られていた多

紀家舊藏書（東博本）とも異なる。寫字臺印の調査結果から、收書の時期は十八世紀頃まで遡る可能性があるが、現時點では判然としない。

現存する吳鎮による『日用本草』（『家傳日用本草』）は、祖の吳瑞の『日用本草』の元版を校補し、新たに版を起こして出版されたものである。嘉靖四年頃に徽州の黃錠・黃銑によつて刻版され、龍谷本はこの版によるものと考えられる。そして、東博本は、この版本をもとに嘉靖四年以降に覆刻されたものと推察され、龍谷本と同じく黃氏によつて版行された。これまで龍谷本は吳鎮重刊の嘉靖版で、東博本もこれと同版だと考えられてきたが、兩本は吳鎮重刊の明版の系統に屬するものの、同一の版ではないことが明らかになった。また、日本への傳來が確認できる時期は東博本の方が先であることも明らかになった。

『日用本草』の内容は、當時ひろく行われていた『證類本草』をベースにまとめられ、地元江浙一帶の産物について吳瑞の知見が加わったところに特徴がある。⁽¹²⁾『日

用本草』の内容はのちに『本草綱目』に反映され、十六世紀以降、同書は基礎的かつ包括的な本草書として国内外で通用した。

なお最後に、日本で『日用本草』が『本草綱目』の内容を理解するための材料として讀まれた例を挙げておく。

吳瑞曰解——食物のどくを解するなり。魚類の料理に生薑を入れるも毒を解するものなればなり。さてゑぐい味を生薑が解するぞ。半夏を生薑で製するがこれなり。いま土地かわりして水のかわりめにあふもの生薑を食ひ、あるいは水のわるいにはその水の中へ一片生薑を入れて煮てつかふたり、湯にしてみたつかふたりして、土地惡毒にあたらぬとなり。食物の毒をせいするゆへなり。（『本艸摘要講義』・生薑）

『本艸摘要講義』（貞享三／一六八六年筆）は、淺井周璞（二六四三—一七〇五）が『本草綱目』の要點を拔粹し

てまとめた『本草拔書』（『本草摘要』に基づく講義の内容を、當時の受講生であつた松岡玄達（二六六八—一七四六）が書き留めた講義ノートである。これは生薑（生姜）の效能を説明した箇所でもとになった『本草綱目』・生薑の條には、『日用本草』・生姜の條の「解菌草及諸物毒」という記述が引用されていることが分かる。⁽⁴³⁾

ここでは、解毒の例を複数挙げて、端的にまとめられた吳瑞の見解（「解菌草及諸物毒」）を説明しており、生姜の效能を生徒に分かりやすく講義していた様子がかがえる。

『日用本草』の傳存状況を考慮すると、本書はこの例のように『本草綱目』を通して部分的に知られることのほうが多かったように思われる。また、當時は錢允治の『食物本草』のほうが優勢で、慶安四年（二六五一）の和刻以後、同書はこの時代の食療書の参考書となるほどの影響力を持っていた。⁽⁴⁴⁾ 傳來當初、『日用本草』は一部の識者の間で知られていたが、江戸時代になると『本草綱目』の受容を通してその内容が食療の理解に活用され

た。また、錢允治の『食物本草』にも『日用本草』が収録されていたから、『食物本草』の流通も『日用本草』の内容が當時の食療書に活かされる要因になったものと考えられる。

本稿では基礎的作業にとどまったが、こうした側面を持つ『日用本草』と同時代の本草との比較、醫藥書をめぐる徽州の出版事情については、今後の課題としたい。

註

- (1) 眞柳誠氏は、吳瑞の序文を刊行自序、阿思蘭海崖の序文を再印序と判断し、本書は天曆二年の刊行後、至正三年に再印され、明代で重刊されたとする。龍谷大學大宮圖書館編『龍谷大學大宮圖書館和漢古典籍貴重書解題（自然科學之部）』（龍谷大學、一九九七）四三頁を参照。
- (2) 龍谷大學藏『日用本草』については、龍谷大學大宮圖書館編『龍谷大學大宮圖書館和漢古典籍分類目錄 自然科學之部』（龍谷大學、一九九七a）、同『龍谷大學大宮圖書館和漢古典籍貴重書解題（自然科學之部）』（龍谷大學、一九九七b）で解題が附された後、二〇〇〇年に中國文化研究會編集整理『中國本草全書』（華夏出版社、二〇〇〇）に影印が収録され、二〇〇三年に鄭金生氏に

よる校點本が出版された（鄭金生「日用本草」鄭金生主編『海外回歸中醫善本古籍叢書 第九冊（人民衛生出版社、二〇〇三）。二〇〇七年には嚴紹璽編著『日藏漢籍善本書錄』（中華書局、二〇〇七）に収録されて解題も附されている。

- (3) 近世日本の醫學・本草に關する先行研究のうち、日の醫學交流の視點から中國傳統醫學の傳來から受容までの沿革を總括した研究として、岡西爲人『本草概説』（創元社、一九七七）、小曾戸洋『中國醫學古典と日本—書誌と傳承—』（塙書房、一九九六）を参照。
- (4) 明・萬曆四八年（一二二〇）頃、藏書家として知られる錢允治（一五四一—一六二四）が、汪穎の『食物本草』七卷と合刻して『食物本草』十卷に仕立てたもので、『日用本草』は第八卷から第十卷に収録される。『食物本草』はその著者と成書過程が問題とされてきたが、『日用本草』に關しては吳瑞の著作であるとの見解で一致していた。しかし、鄭金生氏によって、この『日用本草』の部分は明・寧源『食鑑本草』を改編したものであることが明らかにされている（前掲鄭二〇〇三、四六〇—四六三頁）。ただ當時としては、中日雙方で吳瑞の『日用本草』として通用していたことには違ひはない。『食物本草』の成立と日本への傳播については、岩井大慧『食物本草に就いて』（『東洋學報』二九卷三・四號、一九四

(4) 六五五・六八一頁、中村璋八・佐藤達全『食經』（明徳出版社、一九七八）七二二頁、上野益三「解題食物本草」吉井始子編『食物本草大成』第四卷、（臨川書店、二〇〇七）一・二頁を参照。

(5) 明・高儒『百川書志』、明・朱睦㮮『萬卷堂書目』、明・趙琦美『脈望館書目』、清・陸澹謬『佳趣堂書目』などに記録が残る（前掲鄭金生二〇〇三、四五六頁）。

(6) 江戸時代中期の稻生若水（一六五五―一七一五）は、『炮炙全書』の参考書目として『日用本草』を挙げ、多紀元胤『醫籍考』巻十五・食治の條や、澁江抽齋等『經籍訪古志』巻七・醫部の條には、その所在が明記されている。なお、眞柳氏らは本書の渡來時期を、『炮炙全書』参考書目の條をもとに、元祿二年（一六八九）に比定している（眞柳誠・友部和弘「中國醫籍渡來年代總目錄（江戸期）」『日本研究』第七集、一九九二、一五一―一八三頁）。

(7) この時の調査については、前掲龍谷大學大宮圖書館一九九七a bを参照。

(8) 當時の調査結果は、『江戸幕府舊藏資料の總合的研究』（研究代表者：高橋裕一、平成十七年度・平成十九年度科學研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書）（東京國立博物館、二〇〇八）で報告されている。『日用本草』のデジタル畫像は、以下で公開されている。<https://>

webarchives.tnm.jp/dlib/detail/67

(9) 前掲龍谷大學大宮圖書館一九九七b、四三四頁、鄭金生二〇〇三、四五三―四六三頁。

(10) 眞柳誠「目で見る漢方史料館（一二） 現存唯一の元「家傳」日用本草」八巻本―龍谷大學所藏の貴重本より」（『漢方の臨床』四四巻九號、一九九七）一〇五八―一〇六〇頁。

(11) 前掲東京國立博物館二〇〇八、四二頁。東博本には版元の情報がないため、装丁の状態（五穴、外題墨字ベタ書きなど）をてがかりに判斷したものと思われるが、同本が朝鮮活版であるとは考えにくい。

(12) 龍谷本には、巻一の一葉（以下、一一と記述）、巻二・一一・三三、巻三一・三三、巻七・五・六、陳鰲序文の一・二に「定」、巻五・一・三三、巻六・六・七に「先」、巻五・二に「日」、巻七・八に「此」。東博本には、巻二・一・三三、巻三・一三、巻四・一三、巻五・一・十一・十二に「先」、巻七・二に「白」とある。

これらは、龍谷本に「黃錠黃銃刊」とあることから、「定」は黃錠、「先」は黃銃と考えられる。東博本に刊記はないが、東博本の「定」と「先」も黃錠と黃銃とみて間違いない。この二人について、瞿冕良編著『中國古籍版刻辭典』（蘇州大學出版社、二〇〇九）には、黃銃は歙縣の人、黃錠は黃時錠、歙縣墩田の人とある。李國慶

編『明代刊工姓名全錄』（上海古籍出版社、二〇一四）には、二人は黃仕珍（一四六八―一五二六）の子で、黃氏二五世とする。なお黃氏の系譜上に「此」や「日」、「白」に該当する人物は確認できなかったが、黃氏二四世代に「玉」を偏を持つ人物が集中していることから、「玼」、「珀」ではないかと推測される。

(13) 刊記の□字箇所について、龍谷大學大宮圖書館一九九七bは「□」、鄭金生二〇〇三は「仇」とする。前掲瞿冕良二〇〇九によれば、黃銑や黃錠など、歙縣の黃姓で金偏の刻工は、虬村か歙田の出身である。虬村は歙縣の西に位置し、別名「仇村」または「仇川」とも呼ばれ、もとは仇姓の刻工が住まう村落であった。仇姓の凋落後は、唐末に黃氏の祖がこの地に移って一族を形成し、明代では多くの刻工を輩出する村として繁榮した。よって、本稿では□字を「仇」と判断した。虬村の由來については、張秀民『中國印刷史』（上海人民出版社、一九八九）七四七―七四八頁、繆咏禾『明代出版史稿』（江蘇人民出版社、二〇〇〇）一〇〇―一〇一頁を参照。

(14) 卷一の二葉表（以下、一・二aと記述）、卷二・三a・四a、卷三・二b、卷四・二ab・五b、卷五・五b・九a、卷六・六b、卷七・二b、卷八・六aに墨釘が残る。これに對し、東博本には卷七・二ab・十二aに墨釘がある。

(15) 東博本は、すでに墨釘が補われた龍谷本の版による刷本をもとに覆刻した、あるいは墨釘の残る龍谷本の刷本をもとに新たに文字を入れて覆刻した、のいずれかが考えられる。さらに、東博本に新たな墨釘が見られるのは、覆刻の際に使われた刷本の状態がよくなかったとも考えられる。本文中に記した「米」「葱」が文字をなさないことも、それを物語るかもしれない。

(16) 元では、中統三年（一二六二）に各路に初めて醫學が置かれ、その後は州縣單位にも整備されて醫の聖人を祀る三皇祭祀（三皇廟）が義務付けられた（『元典章』禮部卷五・典章三二・學校二・醫學・設立醫學）。學校の様式や醫學職の登用など、學校經營に關する規定は儒學に依據して整備されたが、教育および祭祀の面では儒學から完全に獨立している。

(17) 黃潛『金華黃先生文集』・卷十・「海寧州三皇廟祭田記」によれば、海寧州では知州の主導のもと延祐五年に三皇廟の建設がはじまり、翌年に完成している。その後は儀制や様式に段階的に手が増えられ、海寧醫學は後至元年間（一二三三―一二三四）に廟學としての體裁が整えられている。

(18) 當時の醫學では、醫戶のほかにも醫藥業を営む家系の者や儒者も就學が許されていた（『元典章』禮部卷五・典章三二・學校二・醫學・講究醫學）。

- (19) 原題を缺いており、前掲鄭金生二〇〇三に従い「自序」二字を補う。
- (20) 亦聞儒者云、宣聖不飲沽酒。饕餮餒敗、色惡臭惡、失饪不時、皆不食。飲食之所慎、豈但醫云乎哉。(『日用本草』「自序」)
- (21) 龍谷本の缺丁箇所該當し原題を缺く。前掲鄭金生二〇〇三に依い「日用本草序」五字を補う。また文中の判讀しづらい二字については鄭氏に従っている。
- (22) 至正九年(一三四九)頃に書かれた貫雲石の神道碑である『圭齋文集』卷九・「元故翰林學士中奉大夫知制誥同修國史貫公神道碑」に「子二人、長阿思蘭海涯、歷蘭溪州達魯花赤・推茶提舉・慈利州達魯花赤、所至以清白吏著聞」とみえるほか、『環谷集』卷四・「送推茶提舉貫公子素詩卷序」に略歴が残される。
- (23) 『明史』卷二八六・程敏政傳、『國朝獻徵錄』卷三五・禮部三・「禮部右侍郎兼翰林學士程敏政傳」などに略歴が残る。程敏政の生涯と學問系譜の概略は、石田一夫「程敏政について——朱陸異同についての一考察」(『中國哲學論集』特別號、一九八一)二三四頁を参照。
- (24) 文元、吾休寧世家、其先弗齋先生、爲宋宿儒定宇先生號朱子世適。其子孫皆業儒、；值豫家居、來從學南山書院。(『篁墩文集』卷三五・贈遂昌訓導陳文元序)
- (25) 萬斯同『明史』卷一三六に、「李汛、鏡山稿十三卷、
- 字彥夫、祁門人、弘治乙丑進士、恩思知府」とみえる。
- (26) 龍谷本の缺丁箇所該當し原題を缺く。前掲鄭金生二〇〇三に従い「吳鎮題識」四字を補う。文中□箇所も缺損して文字がないが、前後の文脈から書名と判斷し「用本草」三字を補う。
- (27) 抑觀魯記、宣父沽酒市脯不食、饕餮餒敗、色惡失饪、不時之物不食。則飲食固聖門所當謹也。瑞卿可謂善學。繼其考志、脩復先世遺文、俾二百餘年、殘仁斷惠、續行於世如一日。世顯可謂善紹。(『日用本草』重刊日用本草序)
- (28) 昔人云、莫爲於前、雖美弗彰。莫爲於後、雖盛弗傳。此豫所以深嘉瑞卿之能作、而世顯之能述也。(『日用本草』書家傳日用本草後)
- (29) 前掲の龍谷大學大宮圖書館による一九九七年の調査報告に東博本に關する言及はないが、のちにウェブ上に公開された同調査報告に基づく『日用本草』解題の中では、東博本と多紀家舊藏本との關係が附け加えられている。
<http://square.umin.ac.jp/mayanagi/paper03/ryukoku/nichiyouhonzou.html>
- (30) 國立公文書館編『改定増補内閣文庫藏書印譜』(國立公文書館、一九八一)七六頁を参照。
- (31) 角倉一族の事績に關する近年の論考として、河内將芳「戰國期京都の酒屋・土倉の一存在形態——中世角倉研究

の拾遺」(『日本歴史』五二〇號、一九九一) 一八・三〇頁、同「戰國期京都の土倉・酒屋と商・手工業座の一關係―角倉吉田宗忠と洛中帶座を中心に」(『日本歴史』五三八號、一九九三) 九二・九八頁、原田正俊「中世の嵯峨と天龍寺」淨土眞宗教學研究所・本願寺史料研究所編『講座蓮如』第四卷、(平凡社、一九九七) 七九・一一二頁、野田泰三「他」「角倉一族の歴史と文化的活動について」(『京都光華女子大學研究紀要』五一號、二〇一三) 一四二・一五六頁を参照。なお、角倉吉田家と醫業の關わりについては、奥澤康生「醫家吉田家の家系圖と人物像」森洋久編『角倉一族とその時代』(思文閣出版社、二〇一五) 九九・一二三頁に詳しい。

- (32) 江戸醫學館の成立とその背景については、町泉壽郎「醫學館の學問形成(一)―醫學館成立前後」(『日本醫史學雜誌』四五卷三號、一九九九) 三三九・三三七二頁、同「醫學館の學問形成(二)寛政の改革期の官醫たちの動向―『よしの冊子』の記事から―」(『日本醫史學雜誌』四五卷四號) 五五・五五二頁、同「醫學館の學問形成(三)幕末考證學の位相」(『日本醫史學雜誌』四六卷一號) 三・一二頁を参照。

- (33) 前掲國立公文書館一九八一、二八・二六頁を参照。
(34) 多紀家の藏書目録は國內外に二十本ほど確認されているが、成書時期や相互關係については未だ明らかにされ

ない部分が多い。本稿では、これら傳本のうち成立過程の検討がなされた早稻田大學所藏の抄本『聿修堂藏書目』、國立國會圖書館所藏の抄本『聿修堂藏書目』、『聿修堂藏書目録』で確認した。三つの目録にかぎっても『日用本草』の著者やその説明は統一されておらず、本書の内容も當時はまだ『食物本草』の縮编版で理解されている。多紀家藏書目録については、木場由衣登「江戸考證醫家の藏書目録について」(『日本醫史學雜誌』五五卷二號、二〇〇九) 一八三頁、竹内尚「聿修堂の藏書目録について」(『日本醫史學雜誌』五七卷二號、二〇一一) 一五三頁を参照。

- (35) 帝室本の收書・形成の経緯は、東京國立博物館編『東京國立博物館百年史』(東京國立博物館、一九七三)、佐々木利和「博物館書目誌稿―帝室本之部博物館書篇―」(『東京國立博物館紀要』二一號、一九八五) 一三五・一五二頁に詳しい。

- (36) 東京國立博物館に所藏される帝室本の目録には、『博物館書目』(明治十一／一八七八年刊)、『帝室博物館和漢書分類目録』(明治三三／一九〇〇年刊)の二種類があるが、これら目録に『日用本草』は著録されていない。

- (37) 同館の藏書に登録番號が附されるようになるのは、明治十四年(一八八一)に博物局が農商務省の所管になってからのことで、次いで明治十九年(一八八六)から二

○年（一八八七）の千代田文庫（現国立公文書館）への移管後に再度番號が附された。それが茶色縦書きの帝國博物館藏書票である。さらに臺帳の整理が進められ、白く小さめの東京帝室博物館和書レベルが附された。（前掲佐々木利和一九八五、一六三頁）

- (38) 歴代宗主による收書と寫字臺文庫成立の経緯は、平春生「寫字臺文庫の成立について」（『龍谷大學論集』三四二號、一九五一）五八―八三頁、同「『釐正寫字臺文庫目錄定則』―寫字臺文庫研究資料」（『龍谷大學論集』三八四號、一九六七）八三―一〇八頁、大取一馬「他」『龍谷大學圖書館藏「寫字臺文庫目錄」の研究』（『龍谷大學佛教文化研究所紀要』四〇集、二〇〇一）一三二―一四二頁に詳しく、寫字臺印の概要は前掲の平論文のほか、太本彰「松岡玄達自筆本と寫字臺文庫」（『龍谷史壇』一二四號、二〇〇五）、三三―五三頁にまとめられる。なお、印影は國文學研究資料館の藏書印データベースにて公開されている。<http://basel.nijiac.jp/~collectors/seal/>
- (39) 歴代黃氏の系譜と彼らのがけた明代典籍の全容は、前掲李國慶二〇一四にまとめられる。これによれば、黃錠は、明・程典輯『休寧葆渚二溪程氏宗譜』（明嘉靖休寧程氏刻本）一種、黃錠は、『後漢書』（嘉靖八年至九年南京國子監校刻本）、『文獻通考』（明蕪陽馮天馭校刊本）などの十二種を版刻した。このうち黃錠は、著名な新安

醫家の汪機『石山醫案』（二種）を版刻しており、李汛は、これに行狀を附して診療内容をまとめるなど、同地域での醫書の出版に深い関わりをみせている。

- (40) 前掲李國慶二〇一四下冊、一〇二―一〇二四頁を参照。

- (41) 龍谷大學大宮圖書館では、寫字臺文庫舊藏本のうち醫學・藥學等に該當する古典籍約六二〇點に對して寫字臺印の調査を実施している（前掲太本彰二〇〇五、五一頁）。本願寺の收書傾向は平氏の研究で明らかにされていたが、この調査によって史資料の両面から醫藥書蒐集の傾向が裏付けられたことになる。

- (42) 鄭氏は、『日用本草』各品目の性質、效能、忌避の記述に『證類本草』からの引用が多く見られることを指摘している。また、明清時代に編纂された本草の中で『日用本草』を最も引用したのが李時珍の『本草綱目』であることに着目し、その引用種目の分析から本書の特徴を割りだしている（前掲鄭金生二〇〇三、四五七―四六〇頁）。

- (43) 該當箇所について『日用本草』と『本草綱目』では、以下のように記されている。
- 辛味、微溫、無毒。主傷寒・頭痛・鼻塞・咳嗽・上氣・止嘔吐・不下食。去風邪寒熱・心下急痛。調中去冷・除痰・開胃。爲諸藥使解菌毒及諸物毒。搗姜汁和蜜水服之、

能治中熱不能食。〔『日用本草』卷八・五味類・生姜主治、…益脾胃、散風寒（元素）。解菌蕈諸物毒（吳瑞）。生用發散、熟用和中。解食野禽中毒成喉痺。浸汁、點赤眼。搗汁和黃明膠熬、貼風濕痛甚妙（時珍）。〕『本草綱目』榮部第二六卷・榮之一・生薑

（44）前掲中村璋八・佐藤達全一九七八、十八二〇頁を参照。

寄稿規程

編集委員會

一、寄稿者は本學會員に限り、必ず完全原稿でお願いいたします。枚数制限は以下のとおりです。

論考 四百字語四十枚程度

研究ノート 四百字語二十枚程度

書評・新刊紹介 四百字語十枚程度

國際學界動向 四百字語十枚程度

なお、論文寄稿の場合には、左記の論文要旨を添附してください。

○外國語による論文要旨

要旨の作成は原著者に一任いたしますが、編集委員會が校訂する場合があります。外國語は原則として英語とし、語数は三百語程度とします。中國語表記はウェード方式、あるいは拼音（ピンイン）方式でお願いいたします。

○外國語による論文要旨の日本語原文

投稿に際してはホームページ上の寄稿要項、原稿整理票を参照してください。

○本誌に掲載された原稿は、発行より三年経過した後にウェブ上に公開されます。ウェブでの公開を承諾されない方は投稿時にお知らせ下さい。

なお公開される場合も著作権は執筆者にあります。（詳しくはホームページをご覧ください。）

三、原稿締切は、六月二十日、十二月二十日といたします。

四、内容は未発表のものに限り、採否は、當學會に御一任ください。

五、抜刷を御希望の方は、有償でPDFファイルまたは印刷冊子を作成いたします。

六、特殊製版（圖版・寫真版など）、組み替えなどの費用は寄稿者の負擔となります。

送付先 〒305-8571 茨城縣つくば市天主臺一〇一

筑波大學人文社會科學研究科 歴史・人類學專攻 丸山宏研究室内

日本道教學會事務局

電話 〇二九一八五二一四〇五〇

E-mail: info@taoistic-research.jp